

クメール紀行

杉田 望

シエムリアップの街



アンコール・ワットはカンボジアの首都プノンペンから、飛行機で北西に約一時間の距離のシエムリアップ市近郊にある。三月のカンボジアは乾期にあたり、日中は三八度の猛暑で、大地は淡褐色に乾いている。

早朝、私たちはプノンペンからシエムリアップに向かうことになった。シエムリアップ行きの飛行機は早朝に出るため、五時起きでソフィテル・カンボジア・ホテルを出発し、七時には機上で腰のベルトを絞めていた。

定刻にプノンペン首都国際空港を離陸したフランスのエアロスパス社製ターボプロップ機、ATR72は、心地よいエンジン音を響かせ、眼下左手にメナム川を捉えながら北上を続けた。

確か昔は、バンコクからシエムリアップまでの直行便があったはずだが、今はない。そこで私たちは成田からバンコクを経由しプノンペンに入り、プノンペンで一泊したのち、翌朝にシエムリアップに向かう旅程をとったのである。

この国を訪れる観光客は今も昔も首都プノンペンを素通りし、森に囲まれた田舎町シエムリアップを訪れる。私たちも、他の観光客と同様に早朝、プノンペンを出立し、プ

ロペラ機に搭乗したというわけだ。長く続いたこの国の戦乱がいまでも観光客の足を遠のかせているのか、座席は六割ぐらいしか埋まっていなかった。

機は十分ほどで機体を水平に立て直した。プロペラ機だが速い。三十分後には眼下に大海と見間違ふようなトレンサップ湖の上空に達した。それでもいまは乾期で、雨期に入ると湖面は十倍にも広がるというから、雨期のトレンサップ湖の広がりには想像にあまりある。



古来からトレンサップ湖は周囲の住民の漁業を助けている。いまもトレンサップ湖からの魚がブノンペンの市場を賑わしているそうだ。やがてトレンサップ湖を離れ、機はエンジンを一呼吸させ、ゆったりと右旋回しながら雲の合間に広がる淡褐色の大地に迫った。

乾期の、この季節には珍しく小雨がぱらつき、淡褐色の大地をわずかに濡らしている。降り立ったのは簡素な飛行場で、まことにのんびりしている。私どもは迎えるマイクロバスに乗り、一路、シエムリアップの市街に向かった。

「間もなくシエムリアップですよ」と、ガイド役のクエンさんは車窓に広がる大地を指さす。クエンさんはカンボジア人で、目がキラキラと輝く日本語をよくする好青年である。彼の早口の日本語で説明されると、アンコールはますます謎めいてくる。

農家が点在するひなびた農地の中を簡易舗装路が一直線に延びている。所々に桐の花が煙るように咲き、水牛がのんびりと草をのみ、ガチョウが水田で遊ぶ、あくまでもの

どかな南国の田園風景が広がる。その風景を椰子の林が引き締めているぐらいで、この土地で、数百万もの大量虐殺があったということなど嘘のようである。

アンコール遺跡国際調査団の定宿

やがて私どものマイクロバスはシエムリアップの市街に入った。古びて半ば朽ち果てた古い木造の家屋が道の両側に続いている。ここは停滞と混沌が入り交じり、どう形容すべきか、それでいて奇妙な活気のある街だった。案内されたホテルはバイヨン・ホテルという。アンコール・トム中央にあるバイヨン寺院に由来した命名なのであろう。バイヨ・ホテルは、上智大学アンコール遺跡国際調査団の定宿だが、アンコール・ワット遺跡救済事業のため日本からやってくるボランティアたちも使っているようで、朝早くからホテルの小さなロビーはごった返していた。

南国の街にしては珍しく、シエムリアップの街は小雨がぱらつき、朝霧にけぶついている。ホテルの前には、やや干上がりかけた小さな川があり、粗末な木橋が架かっていた。その川の向こうには、手入れの行き届いた仏教寺院が見えた。学童らが掃き清めている寺院の回廊の奥には、線香を焚き、供物を捧げる老婆の姿があった。

老婆の信仰の対象は仏像で、今も昔もカンボジアの人々は信心に厚い。カンボジアの仏教は、日本などに伝わった北伝仏教に対して南伝仏教と呼ばれているものである。

うずたかく供物が供えられた仏像の前で、老婆は、もうもうと線香を焚き、経を唱えていた。仏像は金色だし、これほどお洒落だったのかと思わせるほど原色で着飾っている、私には華麗すぎるように思えた。でも、この南国の自然環境にはそれが不思議に思いつくりする。祈りにも、意味は不明だが、幼い頃を思い起こさせるような懐かしい響き

がある。宗派は違うが、仏教は仏教だという思いを改めて強くし、早くもカンボジアに対する親しみが内から沸き上がってきた。

旅装を解く間もなく、ホテルで朝食をすませて、すぐさま私たちは用意されたマイクロバスに乗り込んだ。いよいよアンコール・ワットに向かう。初めてのアンコール・ワットに、私たちはいささかハイな気分になっている。ホテル前を出立したマイクロバスは小さな小川を渡り、進路を南西の方角にとった。

賑やかな顔ぶれ

午前八時。もう朝霧は晴れて、街は炎天下で陽炎に揺れていた。強いに日の光の下で見る街並みは最初の印象よりもずうっと清楚で、キリリとしていて、しまりがある。暗黒のポルポト時代の圧制から解放されたカンボジアは、大急ぎで芋虫から蝶に脱皮するように、必死で遅れを取り戻そうとしているようである。その姿は痛々しくも健気(けなげ)である。



私どもアンコール・ワット視察団はたいそう賑やかである。いまは関連会社の社長を務める元銀行役員と、何ごとにも泰然と構える長髪の中央官庁の元局長のお二人はご夫人同伴。アフリカから中南米まで世界各地の辺境を旅し、食文化については一家言を持つ関西最大の酒造メーカー社長に、その社長とはカメラの腕を競い合う友人の大手印刷会社の専務。百科全書派とでもいうべき、好奇心旺盛な中央官庁の元課長に、出で立ちは「寅さん」風の一流メーカーの幹部社員のほか、寝ても冷めてもカ

ンボジアというカンボジア狂いで、会社の首脳陣を口説き落とす、社会開発などで現地政府にコンサルティング・サービスを行っている現地参加の大手エンジニアリング会社の異色社員。それにあまり売れそうにない小説を書き続けている私を加え、視察団は総勢十名の構成である。元氣一杯なのは、どこの世界も一緒でここでも婦人方だった。最初の質問も婦人方である。

「二十分ほどつきます」

クエンさんは質問に元氣よく答えてくれた。クエンさんは私どものすつかり人気者になっていった。この国では二人に一人がポルポトの犠牲者という。クエンさんもポルポト時代の犠牲者の一人である。クエンさんが中学に上がる、その年にポルポトがこの国を支配した。彼も捕らえられ、乏しい食事を与えられるだけで朝から晩まで農作業をさせられ、いつもひもじかったとか栄養失調や病気で多くの仲間が死んだとも語った。そう話すクエンさんの顔は、いつもの明るいくエンさんとは別人のように悲しそうで、返す言葉を失う。

でも、クエンさんは地方の人で、それが幸いしたのであろう。一人の兄弟を除き、両親や三人の姉妹と一人の弟は健在という話を聞き、幾分救われた気分になった。このクエンさんも話が、アンコール・ワットと総称される遺跡群に及ぶと熱心というより目を輝かせて夢中になってくる。先祖が残したアンコール・ワットは、クエンさんにとって大きな誇りなのである。

シエムリアップからアンコール・ワットに続く参道は、熱帯に分布する紅い土のラテライトで敷き固められた簡易舗装である。クスノキの大樹の向こうにアンコール・ワットの威容が視野に入ってきた。きつい太陽の日に照射されたアンコール・ワットは毅然

として竣立している。感動は人を緊縛きんばくするものだ。私は、コトバを飲み、いつまでもアンコール・ワットの偉容に見入った。

遺跡の子供たち

私どもを乗せたマイクロバスはアンコール・ワットの正面を右折して、そのままバンテアイ・クデイ遺跡に向かった。そこが上智大学アンコール・ワット調査隊の現場である。マイクロバスはバンテアイ・クデイ遺跡の正面広場に停車した。

物売りがどつと押し寄せるのは、どこの観光地も同じである。乳飲み子を背負ったおねえちゃんに手を引かれた五、六歳の幼子が、手にしたコーラを一ドルで買えという。コーラ、クメールのネツカチーフ、竹細工の縦笛、ブツダの絵はがき、木彫りの仏像、なんでも一ドル。幼子らは「一ドル！ 一ドル！」と、唯一知る日本語を叫び、とても商売熱心だ。三本の指を立て、クメールのネツカチーフを一ドルでどうかと聞くと、素直にOKとの返事が返ってきた。

「ひどいな、子供から値切るなんて！」
と非難したのは寅さんである。寅さんは京都の人だが、似ているのは風体だけでなく、人情細やかなお人なのである。子供らに学校は？ と聞くと休みだという。しかし、休みというのは方便というもので、貧困と内戦が、この幼子らの教育を妨げているのだ。貧困と内戦の犠牲になるのは常にこういう幼子なのである。

バンテアイ・クデイの遺跡はブッシュを切り開いた、その空間に突如として現れる。塔門の四面仏は、穏やかな顔で四方を見渡していた。壁龕へきがん状の入口に立つ寺院の守護神、ドヴァアラパール像は、まことに勇壮である。大手印刷会社の専務は早くも高級一眼レフ

を構え、被写体を求めハンターの如くの機敏さで、シャッターを切り始めていた。どこもかしこも、彼には格好の獲物に映るようであった。

私たちはクエンさんの後に続き、バンテアイ・クデイの遺跡に足を踏み入れる。驚きで声を上げそうになった。遺跡の傷みが想像以上だったからだ。柱は傾き、回廊の壁は崩れ、回廊や中庭の祠堂の屋根はほとんど崩れ落ちていて、原型をとどめぬほどに石像は朽ち、素人の目にはまるで瓦礫のヤマに映る。その瓦礫のヤマから昔の栄華を再現する手立ては想像力だけである。



「遠いところ、よくいらっしやいました」
そういつて、私どもを迎えてくれたのは、東南アジア史の碩学、上智大学の石澤良昭教授だった。威張らず、気張らず、気取らずの、老子が理想としたかの人物である。初対面の印象で、明治の時代には石澤教授のような風貌を持つ人物が多数いた。

私たちは石澤教授の案内で、遺跡の内部に入る。そこは「田」の字に回廊を巡らせ、複雑な経路をなしている。中央の踊り場は優雅に「ダンシング・ホール」と名付けられている。

バンテアイ・クデイ遺跡

アンコール・トムの中央にある、クメールの言葉で「僧坊の砦」を意味するバンテアイ・クデイ寺院は、アンコール・ワットに比べると地味で秘やかな遺跡である。学者た

ちの研究によれば、この遺跡はジャヤヴァルマン七世の十二世紀末に建立された寺院だという。規模は東西に七百メートル、南北に五百メートルの広さを持ち、もちろん、アンコール・ワットに比べれば、造りは小振りである。

ジャヤヴァルマン七世は、十二世紀から十三世紀にかけてクメールを支配した人物で、石澤教授の碑文研究によると、彼は信仰心の厚い仏教徒で、政治や武人としての資質に優れていただけでなく、王自身が善行を好み、数々の美徳を実践し、良心に従って行動し、臣幕からも敬愛されて、若いときから博学な人物であったという。ジャヤヴァルマン七世の彫像が東北タイのピマイ遺跡および中部タイのスコータイでも発見されているという。

この時代、仏教建築は世界的にブームを呼んでいたらしく日本では鎌倉幕府が鎌倉の高徳院の庭に、阿弥陀如来を鑄造している。いわゆる「長谷の大仏」で、像は十一・三九メートルの高さで、鑄造を始めたのは建長四年（一二五二年）という。その長谷の大仏建造から遡ること約五十年前に建立されたのがこのバンテアイ・クデイ遺跡である。

建築様式といい、建築技術といい、こうしてみると、芸術的にも優れ、石像や壁に彫り込まれた文様も実に繊細で、あの時代にこうした建造物を建造したのはまさしく奇跡に思える。けれども、悲しいのは、外見と同様に、内部の傷みは相当に激しいことだった。倒壊の危険があるため一部は参観禁止となっている。

七〇年前の修復事業

建造から五百余年……。この国の人びとは「修復」という概念を持たなかったようで、以来、修復事業の記録はない。遺跡に人の手を最初に加えたのは、この国を保護領とし

たフランス人で、彼らがバンテアイ・クデイ遺跡の修復を行ったのはいまから八十年ほど前のことであった。その痕跡はいたるところに残されていた。けれどもフランス人の努力は無惨というほかなくアーチを支えるコンクリートは剥がれ、差し込まれた鉄筋がむき出しになっていて、遺跡の風化をくい止めるには何の支えにもなっていなかった。

「いまにして考えれば、確かに問題はあり、修復の技術には議論もあります。まあ、当時でいえば、鉄筋で支え、コンクリートで固めて補修するのは最新の技術だったのだと思いますね。その意味では評価されるべき事業でした。しかし、残念なことにフランス人はカンボジアの人びとに修復の技術を伝えなかったのですね。しかし、七十年前に遺跡を修復、保存するという思想がフランスにあったことは驚異です」



と石澤教授はいった。宗主国の植民地に対する傲慢さが見えてくるような話である。七十年前のフランスの状況に対する石澤教授の物言いは公正である。私たちは迷路のような内廊を一周して青空の広がる西側の踊り場に出た。

そこから尖頭を見上げると、大きく傾げて、今にも倒れそうで、何とも不安定である。その尖頭をナイロン製のロープで、補強する仕事をしていたのは、建築工学を専門とする日大建築学部の片桐正夫教授だった。

「こうしないと、たちまち崩壊してしまう」

いま必要なのは修復よりも倒壊を防ぐことが先決で、片桐教授は応急手当の意味を話してくれた。

「これで、倒壊だけは防げます。応急手当をしている間にどうするかを考えるのですね」
そういったのはボランテアで、名古屋からきた石工の親方、小杉さんで、片桐教授と石工の親方がカンボジアの人たちの現地指導にあたっている。

「石の積み上げ方一つとつてみても、当時の技術はたいへんなものですな」 アンコール・ワットの遺跡にすっかり魅了された親方はしきりに感心する。現地の人たちを指図しながらナイロン製のロープで、崩れかかった尖頭を補強する作業に汗を流していた。親方はカンボジア語は理解していない。技術者同士というのは不思議なものであり、コミュニケーションの方法を持っていなくても、現地の若い人とは呼吸はぴったりで、尖塔に立つ現地の若い人に右左と大声で指示を出す。

「とりあえずの応急手当です。まあ、それでも十年は持つでしょう」と、親方は自信ありげにいった。

「素材の砂岩の質がよくないため、倒壊を早めているんです」

塔頂を見上げる石澤教授は悲しげだった。石澤教授は遺跡の一つ一つについて、素人にもわかるように丁寧な説明する人である。クエンさんはここではすっかり聞き役に回り、碩学の話記録に残そうと、懸命にテープを回している。

上智大学アンコール遺跡国際調査団

私たちがバンテアイ・クデイ遺跡を訪れたとき、遺跡ではちょうど日本から着た調査隊がトレンチを掘り、発掘調査を進めているところだった。プノンペン芸術大学の学生



たちを指導しながら、発掘調査を行っていたのは、帝塚山学院大学の中尾芳治教授だった。

「こんなトレンチ調査からも、色々なことがわかるんです」と中尾教授はいった。私たちは中尾教授を囲んで、教授の野外授業に聞き入った。

「ほうー。そうですか。それで、いったい何がわかりました？」

もつとも熱心に質問を繰り返したのは、元銀行役員と寅さんである。

塔門を背にした、左側のちよつとした空き地に深さ二メートル、横に七メートル、縦に四メートルほどのトレンチ。プノンペン芸術大学の学生と日本人学生がいつしよになり、汗を流している姿はいい光景だった。日本人学生は春休みを利用してのボランティアである。

そこから出土した文物を見せてもらった。陶器の破片やら土製の什器など、出土品は雑多である。素人の私たちにも、考古学とは面白い学問で、がらくたのような出土品からいろいろなことがわかるらしい。地層からは建造の年代が確定でき、陶器の破片からは往事の人びとの生活と国際交流の広がりが見えてくる。

こんどは上智大学アジア文化研究所の所長の青柳洋治教授が寅さんの質問に答えて言う。

「ここから中国産の青磁の破片が出土しました。唐代のものでしょうかね。そこから当時の人々の暮らしや、当時のカンボジアの国際交流が見えてくるのです。これは中国産の什器。当時、中国との通商が盛んであったことが理解できるわけです」

フランス人は現地の人びとに遺跡の修復技術を伝えなかった。それが遺跡の風化を速めた。上智隊はフランスの教訓を学び、遺跡の補修、修復もさることながら、現地の人びとの教育訓練に力点をおいた協力事業を行っている。

そのことはトレンチ調査を指導している中尾教授も、ボランティアで石工指導をしている親方の小杉さんも、親方と一緒に尖塔の補修を指導している片桐教授もよく心得ていた。それはまたアンコール遺跡の修復事業に関わる石澤教授の信念でもある。

「なんといっても、人材養成が、こういう事業にはかせないからです」

と、自らのことにはあくまでも寡黙なエンジニアリング会社の社員、遠藤宣雄さんは言う。彼がアンコール遺跡と関わりを持ったのは十年前のことで、それまでは平凡なサラリーマンだった。その平凡なサラリーマンがアンコール遺跡で狂気の人になるのは、やはり石澤教授との出会いだった。以来、上智大学アジア文化研究所の客員研究員として、彼は「遺跡エンジニアリング」というコンセプトを実証するため、孤軍奮闘の思いで、カンボジア政府にコンサルティング・サービスを行っているのだった。

バンテアイ・クデイ遺跡に上智大学アンコールワット調査隊が入ったのは、今から十八年前の一九八〇年だという。ポルポトの一時期を除き、以来、石澤教授はバンテアイ・クデイ遺跡の発掘調査と合わせ、遺跡の調査研究と修復保存にあたってきた。調査研究と修復保存は一对でなければならぬというのは、石澤教授のもう一つの信念でもある。

その信念から石澤教授は三十余年にわたり、アンコール遺跡の調査研究と修復保存事業を進めてきた。もちろん遺跡の調査研究には、考古学は当然として歴史学、宗教学、言語学など遺跡や古墳発掘の伝統的な諸学問だけでなく、たとえば建築工学や地質学、農学や水利、さらには現代科学の電子工学、遺伝子工学に加えて、美術家や石工の親方のような技能者を含めた総合科学の、集成としてのプロジェクトなのである。

そうした協力の下で、調査隊はジャヤヴァルマンの碑文の解読を含め、この間に、幾つかの業績を上げている。



杉田 望(すぎた のぞむ)

一九四三年生。早稲田大学文学部中退。市場調査会社、業界紙編集長・社長を経て一九八八年に執筆活動に専念。現在、企業経営、通商問題、中国問題を中心に経済評論を続ける一方、ノンフィクション、経済小説を発表するなど多面的な執筆活動を展開中。主な著書に、プラントビジネス(講談社文庫)、小説半導体戦争(講談社文庫)、管理職の叛旗(講談社文庫)、自動車密約(講談社)、香港密約(講談社)、満鉄中央試験所(講談社)、黒幕会社(立風書房)、アジアNIES最前線(駿々堂)、就職・改造(共著・岩波書店)、企業探検(共著・社会思想社)、野望の奇跡(共著・旺文社)など多数。